

第29回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：国務大臣・国家公安委員会委員長賞（高学年の部）

タイトル：ヒーローはいつまでも

氏名：渡辺 琉愛（ワタナベ ルア）

小学校名：愛媛県 今治市立朝倉小学校 六年

六年前、交番のおまわりさんだった祖父は、火事の現場に急いだ。家一軒が大きな炎に包まれ、あたり一面、真白煙に追われていた。煙の中は真っ赤に燃える家。祖父は住人が中に居る事を確認し、バケツの水をかぶり、炎の中に入っていった。祖父の記憶が戻ったのは病院のベッドの上だった。その時は全身包帯でまかれ、自由が利かない状態だった。体の八割が重度のやけどにおおわれていたそうだ。炎の中に入ればどうなるかは、私でも分かる。分かっている、祖父はおまわりさんというプライドを持って、住人を救ったのだと言った。祖母、母は意識が戻らない祖父を涙を流して心配した。おまわりさんでなければ、こんな姿にならなくて済んだのに。母と祖母は話した。祖父は命を救う事が出来るのはおまわりさんの仕事。地域の家族のみんなが笑顔で過ごせる、安全な地域を作るのもおまわりさんの仕事。おまわりさんは縁の下力の持ち、決して表に立ってはいけない。祖父は退職した今でも私に熱く語る。祖母は、

「じいちゃんが、交番に居た時は、じいちゃんに話を聞いてもらいたくて、沢山の地域の人が来てくれたよ。でも、じいちゃんは、自分の意見は言わずに、うんうん。って、聞くだけ。田舎の人は話を聞いてくれるだけで、かまんきね。おまわりさんは、聞き上手でないと、人からの信頼も集める事はできんきね。」祖母の話している意味がその時は分からなかった。今なら分かる。おまわりさんは、朝登校する子供が安全に通学できるように見守るだけではなく、挨拶をする子供の目を見て、

「あの子はいつも元気な挨拶がないな。どうしたのかな。」

常にアンテナを張り巡らし、変化に敏感にならなくてはいけないという。今問題となっている、幼児虐待、家庭内暴力、防げる事が出来るかもしれない。祖父は毎朝の挨拶からも察知したという。小学校の相撲のぎょうじにも祖父は参加していた。今の時代、ふんどしを巻いて相撲を取る子供など思っていたが、祖父の周りには、大きな体の小学生が土俵の前に集まり、敬語で祖父に話しかけていた。祖父の人間性を見る事ができた。おまわりさんとして尊敬され、地域の子供の成長を見守るおまわりさんとして、子供からも認められているのだ。私は、交番で過ごした祖父の時間は人生でかけがえのない宝物だと思う。人から頼られる仕事、おまわりさんという仕事に祖父は誇りを持っていた。だから、炎の中にも飛び込んだ。私は祖父の正義の心を受け継ぎたい。祖父こそが、本当の地域のおまわりさんだと誇りに思う。誰からも頼られ、地域の問題事にはみんな納得するように知恵を

絞り、子供が安全に生活できるように、通学路を見回った。私の祖父は死ぬまで、私のヒーローだ。おまわりさんの祖父を見る事はできないが、祖父は自慢のおまわりさんだ。